

# 焼け跡の人情つないだブラックの街

下

—七十七年の自治を展覧会で回顧—

ノンフィクション作家 三山 喬

JR東北本線の下りで仙台駅の次、東仙台の駅前から線路沿いを進行方向に行くと、歩いて五分ほどで五階建ての「仙台市新田住宅」が見えてくる。

宮城野区新田地区にある築十三年の市営住宅だ。

ここにはかつて備蓄米を保管する食糧庁の「仙台政府倉庫」があり、仙台市は二〇〇八年、老朽化した施設解体後の跡地を国から譲り受け、追廻住民を受け入れる市営住宅を建てることを決めた。

## 住めば都、暮らしやすかった追廻

終戦後、青葉山麓に約六二〇戸が築かれた追廻住宅も、この時点で残るのは七十戸ほど。地元の自治組織

「長屋的な雰囲気」は「普通のマンションふう」に変わったが、それでも人々は移転後も、新年会や防災訓練、納涼祭、敬老会、芋煮会等々、四季折々のイベントで活発に交流を図ってきた。

より早い段階で各地に四散した元住民たちとの「ヨコのつながり」はもはや存在せず、その意味で新田の親和会はほぼ唯一残存する「元住民のかたまり」と言えるわけのだが、前記した各種イベントもコロナ禍をきっかけに休止状態となり、物故者もすでに十人を超えてしまったため、市はやがて空き室に新規の入居者を一般公募するはずだという。

こうして戦後八十年近く続いてきた「追廻住民の結束」も、いよいよ最後の局面を迎えようとしている。

追廻に生まれ「第二世代」となる佐々木昇（六十五歳）の話では、彼が両親の死後、帰郷したバブル期の段階で、追廻の高齢化はかなり進んでいた。その後立ち退き問題で市と対峙した親和会幹部は、みな佐々木の親世代以上。追廻最後の親和会会長・小泉忠（故人）は、交渉が大詰めを迎えた二〇〇六年には八十三歳になつていた。

その一方、新田の親和会で役員を務める高谷たち三

「追廻住宅親和会」は、最終的に市の提案に同意した。実際の集団移転はその三年後。さらになお追廻に残った八軒も、二三年春までにすべて撤去された。

「でも集団移転のとき、追廻から新田に来た人は、全部で四十四世帯いましたけど、現在は三十一世帯。高齢者ばかりだから、亡くなる人が多いんです」

サッシ戸から周辺の住宅街を見下ろせる四階中央部の入居者宅。集まってくれたのは、ここに住む追廻出身者のまとめ役、高谷正子（八十五歳）、庄子信子（八十四歳）、そして後藤雅恵（八十歳）の三人だ。

集合住宅の傍らには転居者用の戸建て住宅も六棟造られて、追廻の人々はこの場所で改めて「新田住宅親和会」を結成した。隣家とも遠慮なく行き来できる

人は、そのころはみな六十代。空襲で焼け出されたり外地から引き揚げたりして追廻に入った人々を「第一世代」とし、佐々木たち現地生まれを「第二世代」とするならば、三人はその中間、「第一・五世代」とでも呼ぶべき人たちだ。

このうち庄子と後藤は結婚して追廻に住み始めた。それぞれ一九六四年と七〇年のことだ。

「ひどいところに来ちゃった、と思いませんでしたか。」

そう問うとふたりは「思いましたよ」と笑った。

「でも慣れちゃえば何でもありません」

「住めば都ですよ」

庄子の夫は建設省職員。結婚した当初は夫の勤務先の建設事務所がある県中部の鹿島台町（現・大崎市）に暮らしたが、長女の出産を機に夫の実家がある追廻に転居した。夫の一家は旧満州の引揚者。その父親は旧満州国政府国道局などに勤務、夫自身は新京（現・長春）の生まれだった。

「夫は転勤族で秋田や東京などあちこちに行きました。遠くに異動するときは単身赴任。私はずっと追廻で子どもを育てました。慣れないうちは、狭い路地を歩く